

## 生物介在療法特別実習（二）（2単位）

担当者氏名 浅野房代・太田光明・土田あさみ・川嶋舟・内山秀彦

◆学習・教育目標（到達目標を記載）

動物あるいは植物を介在させた療法の実践に必要な技術の修得を目的として、（一）に続いて以下の実習を行う。

植物介在療法学では、園芸療法士としての職能を習得するための実習が必要となる。患者を知り、その患者に合う植物と、その植物とどのような関係を持つかが、最も必要とされるスキルである。認知症高齢者、精神疾患、脳梗塞、障害児を対象として、各施設に出向きプログラムの実施をおこなう。また、授業を通して、植物介在療法に必要とされる園芸全般の知識を身につける。

動物介在療法学では、動物を介在した療法・活動・教育における技術、また研究方法を修得するため実習を行う。本学のバイオセラピーセンターおよび関連施設を実習の場として、対象者の評価方法と動物による身体的、精神的効果の定量化を図る手法について学び、また未だ主観的範疇の域を脱していない変動性の高い精神的影響の評価と定量化について、新たな手法による評価から本領域の研究力、創意性を身につける。

◆取り扱う領域（キーワードで記載）

植物介在療法	リハビリテーション	脳梗塞	作業
動物介在療法	対象者評価	介在動物の選択	プログラムの評価

◆授業の進行等について

	テーマ	内容	準備学習(予習復習)等の内容と分量
1	ガイダンス	植物介在療法・動物介在療法における研究とその手法論について言及し、実習の進め方についてのガイダンス	認知症高齢者は、統合失調症あるいは脳神経系疾患を患う患者についての理解を深めるための意欲を持つこと。また、対象者への動物の選択について動物がもたらす脳への影響について定量化し、理解を深めることを目的とする。よって、特別実習（一）で行った内容を十分に復習し事前に理解しておくこと。また特に生物介在療法の計画・実施・評価の流れおよび本領域における研究の手法と評価を復習し最終プレゼンに臨むこと。
2	精神疾患 プログラム	精神病院での植物介在療法のガイダンス	
3	” 実施	統合失調症と植物介在療法の適応の実際	
4	脳梗塞を知る	プログラムの計画	
5	” プログラム検討	プログラムの実施	
		脳梗塞などの脳神経疾患の理解と実際	
6	” 実施	” プログラムの計画	
		” 実施	
7	” 評価	” 評価	
8	脳の障がいを知る	刺激 vs 反応（脳神経ネットワーク）の仕組みを理解し、プログラムを計画する。	
9	馬の揺れ刺激の特徴(1)	馬がもつ特性、なかでも揺れ刺激に着目し、加速度計を用いて	
10	馬の揺れ刺激の特徴(2)	その測定と処理を行う。	
11	脳機能活性の評価(1)	対象者の評価方法として新たな技術である光トポグラフィ(近赤外線分光法)を用い、馬をはじめとした動物との関わりにおける脳機能への影響を考察する。	
12	脳機能活性の評価(2)		
13	視覚的認知と動物(1)	対象者の評価および動物による影響の定量化を図るため、視線	
14	視覚的認知と動物(2)	追従システムを用いて動物による刺激の視覚的認知に対する影響を検証する。	
15	とりまとめ	大学にて発表	

◆教科書及び資料（授業前に読んでおくべき本・資料）

書名／著者／発行所（発行年）

精神医学、作業療法、認知症 などに関する書籍

---

◆授業をより良く理解するために便利な参考書・資料等

書名／著者／発行所（発行年）

その都度に紹介する。

---

◆評価の方法（レポート・小テスト・試験・課題等のウェイト）

事前検討、プログラム、実践および評価に関するレポートおよび実習施設の評価を総合して行う。

---

◆オフィスアワー

随時メール等でのアポイントメントの上、研究室で質問等を受け付ける。

---

◆その他受講上の注意事項

本実習は所属する研究室ごとに実施する。

各自の指導教授および担当教員との綿密な打ち合わせを常に行うこと。

実習の実施内容については記録を残すこと。

特異的な実験機器の各種取り扱いに十分留意し、データの解析から得られる情報とその論理展開に至るまでの過程において各測定の目的を常に意識しておくこと。

---